

論文の要旨

論文題目 自由直接話法と自由間接話法に関する日中比較研究
氏名 顧 那
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 18 年 3 月 27 日

本論文は、日本語と中国語の文学作品における自由直接話法と自由間接話法の形態とその意味を整理し、話法のタイプについて記述するとともに、日中両言語における二つの話法の形態的特徴、使用頻度、間接度の異同を論じたものである。

日本語の自由間接話法は、それに関して多くの研究の蓄積があるにもかかわらず、その形態的特徴が欧米語の場合ほど明瞭ではないために、またそれについての記述が不十分であったために、自由直接話法と混同されることが多い。一方、中国語の自由間接話法に関しては、先行研究そのものが少なく、その形態的特徴について包括的な記述が必要である。また、自由間接話法に関する日中比較を正面から行っている研究は少なく、多くの問題点が未解決のままである。本論文で自由直接話法と自由間接話法の双方を取り上げたのは、日本語と中国語の場合、自由直接話法と自由間接話法の区別が欧米語の場合ほど明瞭ではなく、二つの話法を同時に取り上げないとその全貌を明かすことができないと考えたからである。

本論文では、日本語と中国語における三人称と一人称の文学作品、具体的には小説と童話を研究対象としている。使用する例文は、文学作品から広く収集した。すなわち、中国語訳が存在する日本語小説 11 篇と日本語訳が存在する中国語小説 11 篇の全体または一部から、自由直接話法あるいは自由間接話法と見なしうる用例をすべて抽出し、それを考察の対象とした。論文中に示した量的なデータは、すべてこの 22 篇から抽出した用例に基づいたものである。

本論文は 7 章から構成される。以下、各章の内容について簡単に述べる。

序章に続く第 1 章では、まず自由直接話法と自由間接話法が話法という大きな枠組みの中で占める位置づけを先行研究を通して確認した。次に、日本語と中国語における二つの話法に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘した。日本語と中国語の場合、形態的特徴による定義を避けるべきであるとする理由を述べ、定義に必要な用語を導入したうえで、本論文における自由直接話法と自由間接話法の定義を試みた。最後に、例文の収集方法について述べた。

第 2 章では、作中人物の思考・発話の再現部分とそれを取り巻くコンテキストの意味的關係について考察した。まず 2.1 では、物語テキストの内部構造と各部の意味的特徴について確認した。次に 2.2 では、地の文における思考表出部分の思考・発話主体の判別について述

べた。また、特定の表現形式による判別が不可能であることを例示したうえで、思考表出部分とそれを取り巻くコンテキストの意味的關係によって、思考・発話主体の判別が可能であることを示した。ただし、その意味的關係によっても明瞭に判別ができない場合が存在するが、そういった場合、問題の思考表出部分の思考・発話主体が語り手とも作中人物とも解釈できる二義的なテキストになることを指摘した。続いて 2.3 では、2.2 で述べた意味による判別方法によって作中人物の思考・発話の再現部分と判断されたテキストの意味、つまりその部分が思考再現と発話再現のいずれを表すか、またその思考主・発話主がいずれの作中人物であるか、さらに発話再現の場合に、その発話の順番が何であるかといったことを正確に理解するために、その部分を取り巻くコンテキストの意味を考慮しなければならないことを論じた。最後に 2.4 では、作中人物の思考・発話の再現部分の範囲を確定するには、該当部分とその周辺テキストとの意味關係に頼る必要があることについて述べた。

第 3 章では、日本語の自由直接話法と自由間接話法におけるダイクシス表現の形態と意味について考察し、それらの表現がそれぞれ語り手の要素と作中人物の要素のいずれになるかについて記述した。まず 3.1 では、思考主・発話主を表す人称詞について次のことを指摘した。思考主・発話主は他称詞、対称詞、自称詞、「自分」のいずれによっても指し示されることがあるが、それが語り手と作中人物のいずれの要素になるかは、その意味を考慮して判断する必要がある。日本語の場合、思考主・発話主が明示されないことのほうが多いが、人称詞の欠如は語り手の要素がそこに入っていないことを意味し、作中人物の思考・発話の直接的な再現に使用される手法である。3.2 では、述部の時制と時間副詞について考察し、次のことを明らかにした。作中人物の思考・発話の再現部分に圧倒的に多く用いられるのは、作中人物の思考・発話時を基準軸とした時制形式である。これには非過去形と過去形の両方が見られるが、この用法の時制形式は作中人物の要素である。また、作中人物の内面が語り手によって客観化される過去形の用法も見られるが、この用法の過去形は語り手の要素である。「現在」系列の時間副詞は、作中人物のパートに用いられていれば作中人物の要素として解釈される。「そのとき」系列の時間副詞は、その先行詞が語り手のパートであれば、時間副詞が語り手の要素として理解され、先行詞が作中人物のパートであれば、時間副詞が作中人物の要素として理解される。3.3 では、指示表現について考察し、以下のことを指摘した。作中人物の思考・発話の再現部分に用いられた指示詞は、「現場指示」「知覚対象指示」「観念対象指示」の用法であれば、作中人物の要素になり、「文脈指示」の用法であれば、その先行詞が語り手と作中人物のいずれのパートにおける部分であるかによって、その帰属が決まる。3.4 では、作中人物の思考・発話の再現部分に用いられる「劇的効果」をもたらす表現、具体的には、呼称詞、口語的な表現、「だ体」と「です・ます体」、位相差を示す表現を例示し、これらの表現は作中人物の要素であることを明らかにした。

第 4 章では、中国語の自由直接話法と自由間接話法におけるダイクシス表現の形態と意味について考察し、それらの表現がそれぞれ語り手の要素と作中人物の要素のいずれになるかについて記述した。そして日本語の場合と同様に、諸形態のダイクシス表現が語り手と

作中人物のいずれの要素になるかは、その意味を考慮して判断する必要があると述べた。4.1 では、思考主・発話主を表す人称詞について考察し、日中間に見られる相違について、中国語では語り手の要素として解釈される人称詞の用法が日本語におけるより豊富であることを指摘した。4.2 では、作中人物の思考・発話の再現部分に用いられる時間表現について考察し、次の点を明らかにした。中国語は時制を持たないので、述部の時制による語り手の要素と作中人物の要素の判別が不可能である。この点は、日本語の場合と大きく異なっている。一方、時間詞の使用に関しては、日中間で特に差が認められなかった。4.3 では、指示表現を取り上げ、次のことを指摘した。「这」と「那」という2系列の指示代名詞は、意味と用法に関係なく、語り手のパートに用いられていれば語り手の要素となり、作中人物のパートに用いられていれば作中人物の要素になる。日本語では、作中人物のパートに語り手の要素であるソ系の指示詞が使用されることがあるが、中国語には「这」と「那」という2系列の指示代名詞しか存在しないので、そのような用法は見られない。4.4 では、「劇的効果」をもたらすソーシャルダイクシスの表現について次のように主張した。中国語の場合には「だ体」と「です・ます体」に相当する区別が存在せず、文学作品における言語の位相差もそれほど顕著ではないので、「劇的効果」をもたらす表現は日本語におけるほど豊富ではない。「劇的効果」をもたらす表現が作中人物の要素であることは、日本語の場合と同様である。

第5章では、第3、4章で記述したダイクシス表現の形態・意味と、自由直接話法・自由間接話法との関係について考察した。5.1 では、自由直接話法と自由間接話法のテキストに伝達部が存在しうるか否かについて次のことを指摘した。日本語の場合、現在形で現れる「と思う」およびこれに準ずる述部表現は作中人物の視点を取った語り手の要素であり、自由間接話法のテキストに用いられることがある。一方、中国語の場合、伝達動詞である「想」「觉得」は伝達を目的としていることに加えて、客観性も強いため、自由直接話法と自由間接話法のテキストに用いられることはない。5.2 と 5.3 では、話法の判別について次のことを明らかにした。作中人物の思考・発話の再現部分における諸表現がすべて作中人物の要素であれば、その部分が自由直接話法になり、そこに語り手の要素が混在していれば、自由間接話法が生まれる。そこで、話法の判別は、複数の要素を総合的に見てそれを行わなければならない。自由間接話法には6種類がある。すなわち、語り手の要素である人称詞が用いられるタイプ、語り手の要素である過去時制が用いられるタイプ、伝達部を持つタイプ、語り手のパートと作中人物のパートが共存するタイプ、文体によって判別されるタイプ、意味によって判別されるタイプである。これらのうち、語り手の要素である過去時制が用いられるタイプと伝達部を持つタイプは、中国語には見られない。5.4 では、話法の各タイプの出現頻度を、量的なデータを用いて示したうえで、日中間に見られた頻度差について次のように分析した。日本語には過去形、伝達部、「である体」のように語り手の要素として認められる文法的表現の種類が中国語より多いにもかかわらず、人称詞が欠如することが多く、作中人物の思考・発話時を基準軸とした時制形式も多用されるので、

自由直接話法が創出されやすい。一方、中国語の場合には、述部の時制形式が存在しないので、話法の判別は人称詞によるところが大きい。そして、人称詞が欠如する頻度が日本語の場合ほど高くなく、特に三人称小説において思考主・発話主を表すには他称詞が多用されるので、自由間接話法が多く見られる。

第 6 章では、日本語と中国語の小説原典とその翻訳における自由直接話法と自由間接話法のテキストを比較し、中国語におけるよりも日本語におけるほうが、語り手の介入度が弱く、作中人物寄りの視点が取られやすいということを、量的なデータを用いて明らかにした。日本語の小説における語り手の介入度が弱いのは、主として、人称詞の使用頻度が低いこと、1文の長さが短いこと、そして伝達部や述部の主観性が中国語の場合より強いことに起因することが明らかになった。

第 7 章では、本論文をまとめ、今後の課題を示した。